

歴代王朝の都／東の副都／王墓

◇那珂つ国十天之国（天地）王朝の都／東の副都

【広田遺跡】（福岡県糸島市）、縄文後期末から晩期初頭にかけての遺跡。埋甕・小竪穴・大溝などの遺構が見つかり、大溝からは多量の縄文土器・石器・土製品・玉類・種子などが出土。土偶・石柱・石棒・埋甕は、飛騨・北陸地方など東日本から伝播したもの、打製石斧・石皿・擦石・石包丁は農耕とかかわる石器、土製紡錘車は、紡織に関係する道具とされ、そのつくり方は弥生期の紡錘車につながらないという。

【櫃原遺跡】（奈良県橿原市）、橿原神宮外苑にあった遺跡。縄文晩期の東北地方でやたらと使用されていた亀ヶ岡式土器、関東・東海系の土器が大量に出てきた。一方、櫃原で造られた縄文晩期の土器（滋賀里式系の土器）は、東西南部・関東から北九州にかけて分布する。

【滋賀里遺跡】（滋賀県大津市）、比叡山の南東麓に広がる縄文晩期の遺跡で、近畿地方では最大級である。弧状紋のある黒褐色の浅鉢や模様のない深鉢を組み合わせた様式の滋賀里式土器が大量に出た。東北地方晩期の土器や北陸地方晩期の土器、黒褐色の浅鉢も出てきた。

浅鉢は、九州系黒色磨研浅鉢の影響が認められるという。滋賀里式土器は櫃原遺跡など近畿地方に広く分布しており、近畿の縄文晩期を代表する土器とされる。

◇オロチ敵之国王朝の都

【板付遺跡】（福岡市博多区）、弥生前期初めの水田跡を掘り下げたところから、夜臼式期の突帯文系土器（縄文晩期→弥生早期）や水田跡が出た。用水路・井堰・畦を伴っており、水路からは諸手鋤、水田からも石鎌・炭化米が出土した。前四世紀のもの。銅剣も出土した。

◇倭国王朝の都／東の副都

【宇木汲田（くんでん）遺跡】（唐津市）、弥生前期から中期初頭にかけての集落跡。甕棺墓・銅剣五・多紐細文鏡一・銅戈一など副葬品が出土した。貝塚から弥生前期（二一〇〇年前）の土器、炭化米が出た。甕棺内から細形銅剣二・銅矛二・勾玉二・管玉二九・銅鐸の舌が出た。

【安満（あま）遺跡】（大阪府高槻市）、淀川支流の檜尾川にひらけた平地の小高い所にあつて、淀川水系の中で最も早く出現した集落とされ、前期に集落を囲む環濠が掘られた。

用水路・堰・水田跡、鍬・鋤・杵・杓・おけ・高杯などの木製品、多数の石器が出た。中期前半に集落は拡大し、中期中頃には六〇〇[㊦]四方に広がっていた。

【唐古・鍵遺跡】（奈良県田原本町）、北部・南部・西部のそれぞれから、弥生前期の住居跡（一五〇×三〇〇[㊦]）が見つかり、鍬や鋤の農耕具、斧の柄など工具類、高杯・鉢など木製容器が多数出た。弥生期最古級の巨大な高床式建物跡（南北一二[㊦]以上、東西七[㊦]）も発見された。大型建物跡は吉野ヶ里遺跡や池上遺跡で発掘されたものに比べて、一五〇〜三〇〇年も古く、弥生期を通して近畿の拠点的な集落とされる。

【朝日遺跡】（愛知県清須市）、尾張平野の海近くの小高い所にあり、弥生期中期の東海地方最大級の環濠集落遺跡。縄文末期の土器に混じり、弥生中期の方形周溝墓群、弥生土器、炭化米多数、銅鐸などが発見された。

◇豊葦原中つ国王朝の都／東の副都／王墓

【吉武遺跡】（福岡市西区）、早良平野の南西にあつて、広さは東西六〇〇[㊦]、南北一三〇〇[㊦]もある。その中の樋渡・高木・大石地区から、群集した甕棺墓や木棺墓が見つかった。高木地区の三号木棺墓からも、銅鏡・細形銅剣・銅矛・銅戈など青銅器四種と共にヒスイ勾玉が出

た。前二世紀の墓とされる。弥生前期の高殿らしき大型建物址も発見された。

【池上遺跡】（大阪府和泉市、泉大津市）、信太山の標高一〇^{メートル}の丘陵上にあつた集落で、南北一・五^{キロメートル}、東西〇・六^{キロメートル}に広がり、総面積は六〇万平方^{メートル}もある。

弥生中期には、二重の環濠で守られていた。幅三^{メートル}四^{メートル}、深さ一^{メートル}の環濠に囲まれたその広さは一一万平方^{メートル}に及び、この時期では最大。弥生前期からの住居跡や方形周溝墓、無数の石器・土器、木製の農耕具などが出た。

石器の中には五〇本の石剣があつて、その一つは有柄式の石剣片だった。これは朝鮮半島に由来するもので、北九州からしか出てこない。

神殿らしき高床式大型建物跡も見つかり、直径七〇^{センチメートル}の檜柱の基礎二五本が腐らずに残っていた。年輪年代測定法による調査の結果、前五二年に伐採されたと判明した。中期前半^{（中頃が最盛期らしく、中期終わり（本書の言う倭奴国王朝成立前）に衰退に向かった。}

◇伊都国の王朝の都／東の副都／王墓

【須玖岡本遺跡】（福岡県春日市）、【三雲南小路遺跡】（糸島市）

【池上遺跡】（大阪府和泉市、泉大津市）、信太山の標高一〇^{メートル}の丘陵上にあつた集落で、南北一・五^{キロメートル}、東西〇・六^{キロメートル}に広がり、総面積は六〇万平方^{メートル}もある。

弥生中期には、二重の環濠で守られていた。幅三^{メートル}四^{メートル}、深さ一^{メートル}の環濠に囲まれたその広さは一一万平方^{メートル}に及び、この時期では最大。弥生前期からの住居跡や方形周溝墓、無数の石器・土器、木製の農耕具などが出た。

石器の中には五〇本の石剣があつて、その一つは有柄式の石剣片だった。これは朝鮮半島に由来するもので、北九州からしか出てこない。

神殿らしき高床式大型建物跡も見つかり、直径七〇センチの檜柱の基礎二五本が腐らずに残っていた。年輪年代測定法による調査の結果、前五二年に伐採されたと判明した。中期前半の中頃が最盛期らしく、中期終わり（本書の言う倭奴国王朝成立前）に衰退に向かった。

【須玖岡本遺跡甕棺】遺跡、明治三二年、巨大な支石墓直下の甕棺から、前漢期の草葉文鏡（前二世紀後半）・星雲文鏡（前一世紀前半）など三十数面、細形銅矛四・中細銅矛一、中細銅戈一、細形・中細銅劍二以上、ガラス璧・ガラス勾玉・管玉などが出てきた。

出土した草葉文鏡は径二三センチ余もあり、中国出土の平均径一三センチに比べてはるかに大きい。鏡の年代と甕棺の様式から、前一世紀後半の墓とされる。近辺から、銅劍・銅矛・銅戈・鉄刀を伴う甕棺多数、銅矛・小銅鐸・小型鏡の鑄型、鉄器工房跡（紀元前後）などが見つかった。

【三雲南小路遺跡の墳丘墓一号甕棺】徳川期の文政五年、福岡藩の国学者青柳種信の著書等から推して、内行花文鏡など前漢鏡三五・有柄細形銅劍一・銅矛二・銅戈一・金銅四葉座飾金具八・ガラス璧八、朱入りの壺などが出たと伝わる。これと同形の有柄銅劍が吉野ヶ里遺跡からも出土したことで、吉野ヶ里にあった厳一門が福岡平野に乗り出したとする本書の考えは、的を射ていたことになる。昭和の時代に、一号棺の存在は再確認された。その際、二つの目の甕棺も発見された。二つの甕棺は、三一×二一センチの方形周溝墓内に納まっていた。

二号棺から、前漢鏡二二面、ヒスイ勾玉・ガラス璧片などが出土した。この中のガラス璧は漢の皇帝から諸王や諸侯に下賜されたものの、四葉座飾金具も皇帝から贈られる木棺装飾金具だった。鏡の年代などから、二つの甕棺の墓主は、紀元前後に埋葬された伊都国王夫妻に比定されている。



吉野ヶ里遺跡の
細形有柄銅劍

◇大乱前の倭奴国王朝の都／東の副都／初代女系天神天常立の王墓、七代女系天神の王墓

【桜馬場遺跡】（唐津市）、後期初頭の甕棺から、後漢初期（一世紀前半）の方格規矩鏡二・巴型銅器三・鉄刀一が出た。時期的には、井原遺跡（初代女系天神天常立の陵墓）と同時期。

【唐古遺跡】（奈良県田原本町）、中期中頃、三つの住居区の周りに環濠が掘られ、五〇〇×四〇〇^ミの住居区となった。内側の環濠は幅八^ミ以上、その外側に幅四〜五^ミの環濠が四〜五重に巡っていた。中期後半の土器に、宮殿らしき楼閣も描かれていた。中期後半から末にかけての洪水で、環濠は埋没したが、洪水後に掘り起こされ、最大規模に発展して行く。

【井原鎚溝遺跡】（糸島市）^{やりみぞ}天明年間に見つかる井原鎚溝遺跡は倭奴国王の墓らしい。^{ヤマト}三雲遺跡から南へ一〇〇^ミほど離れた水田の中にあつたという墓だ。その墓から、後漢の方格規矩鏡二一面以上、鎧の札・鉄刀・鉄戈らしきもの、巴形銅器三が出た。この方格規矩鏡の様式は後漢初期のもので、金印を授かった頃に近い。

【平原墳丘墓】（糸島市）、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭太刀一本とともに、破断された四二面分の鏡（方格規矩鏡三五、四六・五^ミの日本製内行花文鏡五）などが出た。そこには、三角縁神獸鏡は一枚も存在しない。

この墓は厳之国の尊ぶ方形墓であるものの、副葬品として天之国祭器の鉄剣・数多の方格規矩鏡、厳之国の称える内行花文鏡がやたら添えられていた。墓の築造時期は、倭国大乱から二〇〇年過ぎにかけてとする見方が有力だ。だとすると、墓主は天之国の権力者として大乱に関わっていたことになる。調査主任だった原田大六氏は、副葬品の内容から女性の墓と睨んでいた。



桜馬場遺跡の

方格規矩鏡